

大塚和との邂逅(6)

日活のプロデューサー時代の大塚和の特徴の一つは、その後の日本映画会を代表する監督となった人材のデヴュウを実現させたことでしょう。その監督のうち一部を挙げると、今村昌平、浦山桐郎、西村昭五郎、藤田敏八、神代辰巳、そして大塚和が日活を退いた後の長谷川和彦という錚々たる顔ぶれです。また、デヴュウ作ではないものの、熊井啓の第二作目「日本列島」(1956)のプロデュースを担当していますし、1969年に大塚和ら十一名で結成した「えるふプロ」の第一作目「地の群れ」(1970)は熊井啓が監督しています。熊井啓に関して言えば、代表作の一つとされる「海と毒薬」(1986)は、日活時代の1970年に企画されたもので、ゴーサインが出ないまま16年という歳月を経て、陽の目を見た作品となりました。

ここで少し、「日本列島」のことに触れますが、この作品は占領下時代のCIAによる謀略事件を扱ったもので、当時まだタブーとされた題材です。熊井啓自身による脚本は完成したものの、会社側は難色を示します。しかし、江守清樹郎専務(当時)の後押しでゴーサインがかかります。この江守専務の存在は、大塚和にとってこの時だけではなく、いろいろの場面での支援となります。その存在は大きなものでした。警視庁から6カ所のシーンの削除を言い渡されにも関わらず、大塚和は聞き入れることなく作ってしまい、警視庁を絶句させたといいます。これまでにないスケールの大きさを感じる謀略事件の映画化であり、アメリカ、ヨーロッパの同種の作品と比較してもまったく遜色のない作品に仕上がっています。しかし、この緊張感とリアリティをもってしても、衰退する日本映画会を救うことはできませんでした。熊井啓はその後も社会派と呼ばれ、数々の問題作(問題提起作といった方が良いのかもしれませんが)を発表し、「海と毒薬」に到達します。熊井啓は2007年に七十六歳で亡くなりますが、遺作となったのは古巣日活で配給された黒澤明脚本の「海は見ていた」(2002)でした。

日活では、製作費はあくまで会社が出しているという考え方から、1958年4月以降は会社の意向で、担当プロデューサーは「製作」とクレジットされず、「企画」としてクレジットされることとなります。このことから日活の経営体質が自ずと判ってくるものです。日活の再製作開始時期から黄金期を支えたプロデューサー諸氏については、別途資料を参照していただくとして、日活におけるプロデューサーとしての大塚和の存在は、毛色の違ったものだったことが当時の関係者の証言からも判然とします。その毛色の違いは、新聞記者、映画専門誌編集者出身という経験からきているものでしょうし、基本的に徒弟制度の下で叩き上げの職人気質を重要視した映画人たちからすれば異質のものだったでしょう。

当時の関係者の証言を集めてみましょう。まず、五社協定で締め出された日活と劇団経営に苦しんでいた劇団民藝についての、映画監督西河克己の証言から。「(日活は)民藝と業務提携を結んで劇団員の優先的出演を獲得した。民藝の人たちの出演は、石原裕次郎から吉永小百合に至る新スターの主演映画を支え、作品に厚みや味わいを持たせる重要な役割を果たした。その時、民藝映画社を代表して、劇団のパイプ役として大塚さんが日活にやって来たのである。(中略)大塚さんは日活のプロデューサーとして仕事をするようになり、日活の新人監督を起用して社会的な芸術作品を世に出して、日活映画の重要な系譜を築いていったが、ぼくは楽天的な娯楽作品ばかり作っていたから、お互いに無縁の関係だった」西河克己は、大塚和からある原作を渡され「もうぼつぼつこういうのをやった方がいいのではないか」と誘ったが、社会性の強い深刻な素材であったため、断ってしまったという。西河克己は「その企画は別の監督が撮って、評判になり、キネマ旬報のベストテンに選ばれたが、ぼくがやっても果たしてそうだったかどうか」と語ります。また、同じく映画監督の藤田敏八は、プロデューサーのタイプを「興行的に困難な映画作りを黙々と後押ししていく理想家肌のタイプ」と「洗練された実業家として製作から興行までがっちり仕切っていくタイプ」があるとして、大塚和を前者のタイプに属するしている。そうした上で、「良心的作家とか社会派とか言われたけど、そういうレッテルを嫌った人だし、そんな言葉では語り尽くせないタイプのプロデューサーだった」と言う。「基本的にリベラルで精神貴族」だったと評しています。今村昌平とはデヴュウ作からの付き合いになりますが、ある作品のクランクイン寸前、予算が合わないという理由で明日のロケに出発するかどうか鳩首会議をしているのに、肝心の大塚本人が現れずといったこと

もあったようで、「彼（大塚和）の文学青年っぽい態度は変わらず、何一つはつきりしないが、面倒は先送りというやり口は、嫌と言うほど体験させられた。しかし後から考えると、はつきりさせないほうがよかったのではないかと思うことが間々あったのは確かだ。なかなかの大人だったのである」と振り返ります。